

学術展示以外では、口頭発表のセッションをほとんど見て回ることが出来なかったことは残念ですが、その他に心残りなこととしては、展示会場の詳細についての案内に不備があり、発表者の方へ大変なご迷惑をおかけしてしまいました。しかし、限られた時間の中であっても、想定外の状況に合わせて出展内容を変更して、なんとか対応して頂けました。これには私の不備に申し訳なく思いつつも、発表者の方の対応に深く感心させられた出来事でした。

今回は、本大会の委員として参加させていただき、私自身としては初めて参加する学会であったため、いろいろと不慣れなこともあったかと思いますが、大会に向けた準備や、大会期間中の様々な発表を通して貴重な経験が得られました。このような大変有意義な機会を与えて頂き、大会の委員の方々と、大会に参加して頂いた学会員の方々に感謝いたします。



芸術展示会場
* 口絵にカラー版掲載

■企業展示担当より

遠藤 恵一

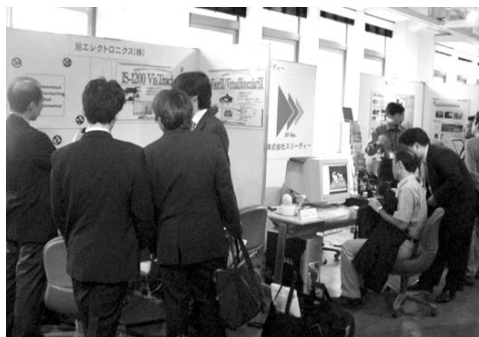
企業展示担当 (ソリッドレイ研究所)

出展社数は16社19小間。昨年の実績は下回ってしまいましたが、幹事・川上先生を中心に IVR2005 会場での勧誘に加わっていただいたお陰もあり、なんとか当初の予算は上回る出展を集めることができほっと胸をなでおろしている。出展製品も多岐にわたり、ご来場いただいた皆様には満足していただける展示になったかと思う。

今大会の企業展示は、東大本郷キャンパス工学部6号館を2部屋使用しての開催となり、メイン会場とも言えるセッション会場、技術・芸術展示とは別棟での開催と

なった。そのため来場者の動員を目的にA室(展示室)にドリンクコーナーを、B室(セミナー室)の隣に受付を設置するなどいくつかの対策を行ったが、B室で初日・2日目とやや低調な人出となってしまった。そのため最終日には、セッション会場で企業展示のご案内を上映して頂き、またアルバイトの方の熱心な声かけのお陰で両部屋とも盛況となり、出展社の皆様にもご満足いただけたのではないかと考えている。

今回初めて大会準備に参加させていただき、不慣れな部分が多く幹事会メンバーの皆様には色々ご迷惑をおかけいたしました。幹事会メンバーの皆様、協力いただいた皆様に、この場をお借りして厚くお礼申し上げます。



企業展示会場 A 室



企業展示会場 B 室

■企画運営担当より

□カルチャーツアー / 東京都写真美術館

齋藤 英雄

企画運営担当 (慶應義塾大学)

カルチャーツアーは「夜の美術館に行ったことがありますか?」と題し、9月27日の夜に恵比寿ガーデンプレイス内にある東京都写真美術館において行われた。

このカルチャーツアーでは、開館10周年特別企画展「写真はものを見方をどのように変えてきたか 第4部～混沌～」と題する1970年代以降の現代写真コレクションを鑑賞した。まず、ツアーの冒頭では、金子隆一氏による展示内容の説明がなされ、その後、約1時間程度、森山朋絵氏とともに、参加者はそれぞれの思いで展示されていた写真を鑑賞した。

「写真は社会を映し出す」という説明のとおり、展示された写真は、そのテーマである混沌とした現代のある一面が表現されているようであった。また、写真芸術というものが、技術的側面と芸術的側面の絶妙なバランスの上に成り立っていることを改めて感じさせられるものであった。

□カルチャーツアー / 印刷博物館

谷川智洋

企画運営担当（東京大学）

第10回VR学会大会の二つ目のカルチャーツアーは、「秋の夜長にVRはいかが ～VRで巡る世界の博物館～」と題し、印刷博物館VRシアターへのツアーでした。直前で参加を決められた方が多く、参加者数は最終的にVRシアター定員ぎりぎりになりました。

本ツアーでは、7月末まで開催された特別企画展『印刷革命がはじまった：グーテンベルクからプランタンへ』と連動して上映されたVRコンテンツ『プランタン＝モレトゥス博物館』を特別上映して頂きました。このコンテンツは、高品質なVR映像に加えハイビジョンや全周囲映像を効果的に組み合わせることで、世界遺産にも指定された勃興期の印刷所の様子を臨場感豊かにガイドツアーするものです。また、同じく凸版印刷が制作したVRコンテンツ『紫禁城・天子の宮殿』も併せて上映して頂きました。

半径8mのカーブ型スクリーンを備え高品質のVR映像提示可能なVRシアターと、高品質なVRコンテンツが相まって、博物館で展示するVRシステムとして完成の域に達していると思われました。参加された方は、VRには一言も二言もある方ばかりでしたが、言葉無く繰り広げられるVR映像にただ見入っていらっしやいました。

本ツアーは、凸版印刷関係者各位の全面的な協力により実現しました。普段見ることができないVRコンテンツの特別上映と専門のナビゲータによる丁寧な解説をして頂きました。改めて感謝の意を表します。

□特別講演・パネルディスカッション

野嶋琢也

企画運営担当（宇宙航空研究開発機構）

1996年に始まったバーチャルリアリティ学会大会は今年で10回目を迎えることとなりました。そこでこの節目の大会を飾るべく、2件の特別講演とパネルディスカッションを開催する計画が立案され、さらに、これを機会に出来る限り一般の人にもVRを身近に感じてもらい、理解してもらいたいという考えから、一般の方に関してはこれらのイベントに無料で参加出来るもの、と決まりました。

私が特別講演・パネルディスカッション企画の幹事就任の打診を受けたのは、そのような基本方針が決まった後、年明けからしばらくしての事でした。最初は何とかなるだろうと高をくくって気軽に引き受けてしまいましたが、仕事の全貌が見えてくるにつれて、これは大変な仕事を引き受けてしまった、と思うようになりました。講演を下さる先生方や、パネリストとして参加して下さる先生を探すことに始まり、各先生方との連絡、内容の調整といったことが主な業務だったわけですが、個人的にはこのような企画を実行するのは初めてのことであり、なかなか勝手が分からずに苦労しました。しかし、今回の企画に委員として参加して下さった今井朝子氏、黒木速人氏、そして何よりも講演者・パネリストの先生方のご協力により、無事に企画を実現することが出来ました。

特別講演での岩井先生の実演や小川先生の楽しいお話、そしてパネルディスカッションでのVRの歴史的な経緯などについて興味深いお話は、学会参加者だけでなく、一般の方も楽しむことが出来たと思っています。惜しむらくは、ディスカッションの時間を充分に取って



岩井氏（写真左）、小川氏（写真右）による特別講演